
繋がる世界

殷樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繋がる世界

【Nコード】

N3710V

【作者名】

殷樹

【あらすじ】

満月の日。季節はずれの桜に触れた新八は・・・!?

銀魂の二次小説(?)になります。初投稿です。ありがちなネタかもしれませんが、少しでもクスツとして頂けたら幸いです。かなり前に書き始めたものなので、最初何話目かまでは現在の原作とキャラの性格や世界観等に多少ずれがあるかもです。基本原作重視。万事屋中心。

1・四季桜（前書き）

始めまして、殷樹と申します。

初投稿です。少しでも楽しんでいただければ幸いです。

1・四季桜

滲むような紅い満月が漆黒の闇に浮かぶ刻
季節外れの薄紅が咲き乱れ

そして

今日は久々に仕事が入った。
いつも通りだるそうな上司と遊びたい盛りの同僚を引っ張って仕事
先に行き、
それほど繁盛しているわけでもない顔馴染みの喫茶店で、珍しく特
に何事もなく無事仕事を終えた。

今は、黄昏時。

道行く人々と同じく、自分たちも家路を急ぐ。

「もうすっかり秋ですねえ」

「秋っつーより冬だろ、もう」

銀時がそう言うと囃ったかのように冷たい風が吹き抜けていった。足元を色褪せた枯葉が舞う。

「見てくださいよ銀さん。夕日がきれいですよ」

銀時の言葉を軽くスルーして、新八が言う。

秋は夕暮れとはよく言ったもんですねえ、なんて言いながら。

「銀ちゃん、新ハイ」

と、ここで神楽の少々間延びした声が二人を呼んだ。

「？」

何事かと自分たちより数歩前を歩いていた神楽の方を見ると、彼女はとある家の前で立ち止まり、いつもの傘を差し、酢昆布をくわえながらその庭を覗き込んでいる。

「どっしたの？神楽ちゃん」

新八が尋ねると、

「いいからちよっと来るヨロシ」と、手招きをする。

招かれるままに彼女の近くに行つて同じようにその家の敷地内を覗いてみる。

と、どうやらそこは個人の家というより小さなお寺のような感じなのだが、今は誰もいないようである。

所々あいた障子の穴から中が見えるが、いくつか机のようなものが見えることからどうやらここは寺子屋として使われていたようだ。

しかし、今、神楽の、そして銀時と新八の目を奪つたものはその朽ちた寺子屋の様相ではなかった。

「・・・なんだ、あれ」

銀時が少々呆けたような様子で呟く。
当然だろう。

そこには今の時季にはありえないものが存在していた。

「何って・・・桜、でしょう?」

銀時の呟きに新八が返す。

見りゃ分かんでしょう、と少し呆れ顔である。

「んなこたあ分かってんだよ。そーじゃなくてだな・・・」

なんでこの時季に桜が咲いてんだよ、春だろ普通。・・・今冬じやん。

だから、秋だって言ってるだろ。

といった不毛のやり取りの後

「どうでもいいけどさ、ホントになんでこの時季に桜なわけ？」

本気でわけが分からないといった感じで銀時が頭をかく。
まあ、これが普通の反応かもしれない。
しかし、

「あれ、銀さん知らないんですか？」

そうやって、万事屋で唯一の常識人である新八はいつものごとく説明を始めた。

「普通の桜は一年に一回、春にしか咲かないですけど、実は秋にも

花を咲かす桜があるらしいですよ」

「マジでか!?!」

新八の説明に銀時と神楽は同時に叫んだ。
本当に親子みたいな反応である。

「はい。四季桜っていつて、十月頃から翌年の四月まで、少しずつ花が咲く珍しい品種らしいですけど……」

まさかこんな近くにもあるなんて思いませんでした。

などと言いながら、新八が何気なくその木に触れたときである。

桜の幹の部分が裂けたように見えたかと思うと、眩しい閃光が辺りを包んだ

しかし、それも一瞬で銀時と神楽はそろそろと目を開ける。

「……っ、なんだったんだ、今は。おい、新八、テメエ一体何し……」

そう言って新八の方に目をやると、彼も同じように振り返り、
そして言った。

「・・・先生・・・神楽ちゃん？」
「・・・は？」

夕日はほとんど西の空に沈み、東の地平線上には大きな満月が妖艶な紅色を帯びて輝いていた

1・四季桜（後書き）

夏真つ盛りなのに秋 冬の話・・・書き始めたのが11月頃だった
のです^^；

2・異変(前書き)

早々に第2話です。

すぐに息切れすると思います・・・。

2・異変

「うん……」

いつの間にやら気を失っていたらしい新八は、そう唸って目を覚ました。

目を開くと秋特有のスカツと高い空が広がっており、夕日で所々朱く彩られている。

そして視界の端々に葉の枯れた木の枝々が映りこむ。

あれ、さっきまで僕、花の咲いた桜の木の下にいたような……

そんなことを考えつつ起き上がると、後ろから声がした。

「おい、志村弟」

聞き覚えのある声に振り返れば、案の定銀時が、相変わらずだるそうな感じで突っ立っている。

隣には、こちらも相変わらず酢昆布をくわえた神樂が立っていた。

「……銀さん……神樂ちゃん？」

さっきまで一緒にいたのだから二人がそこにいるのは当たり前なのだが、

振り返って二人を見るにつけ、新八は語尾を上げざるを得なかった。

「二人とも・・・どうしたんですか？その格好・・・」

新八が尋ねるのも無理はない。

そこにいる銀時と神楽は、いつもの着流しに黒ジャージと赤いチャイナ服ではなかった。

銀時はだぼだぼの白衣に身を包み、ほとんど紐状態のネクタイをだらしなく襟から下げ、ぶつちやけ伊達眼鏡じゃね？みたいな眼鏡をかけ、いかにも安そうなサンダルを履いている。

更に口にはくわえ煙草、である。

神楽はというと、青襟に赤いパーネクタイ、下は青いひだスカートといったいわゆる女子高生スタイル。

つか、ようするにセーラー服である。

こちらの意味があるのか無いのか分からないような、牛乳瓶底眼鏡をかけている。

・・・眼鏡、舐めてんのか？

さっきまでは確かに二人ともいつも通りの格好をしていたのに・・・一体どうしたというのだろう？

と、新八があれこれ考えているところへ更に新八を混乱させるような言葉がかかった。

「どうしたってオメエ・・・そりゃこっちの台詞だっつーの。」

「んだよお前、その格好。袴なんか穿いちまってよー」

つか、それ以前に教師を名前で呼んでんじゃねえ！
と言って、銀時の持っていた冊子で頭をはたかれた。

「痛っ！・・・はっ？！教師？！！」

何わけの分からないこと言っただけ！！と思いつつ、
はたかれた所をさすさすとなでながら、新八は涙目ながら辺りを見
回してみた。

さっきまでいた廃寺じゃない。
自分の向かって右手にある4階建ての鉄筋コンクリートの無機質な
建物や、足元の黒光りした地面がそれを物語っている。

「・・・ここは、一体・・・」

「格好だけじゃなく、頭までおかしくなったアルか」

新八の眩きに神楽の容赦ない毒舌が降ってくる。
こつという所は全くいつも通りなのだけど・・・

「ここは、って、ここあ学校の裏庭でねえの」

見りゃ分かんたら？

と、いつも以上に気だる気な声で銀時が言う。

「・・・学校？・・・」

ここまでくるとさすがに事態の異様さに新八は気付き始めていた。

いつもと違う二人の格好、所々噛み合わない言動、そしてこの場所・・・

（えっ、もしかして・・・）

ふと、頭に思いついた突拍子もない考えに、新八は目を剥いた。

（え、だって、そんなこと・・・）

なんとも突拍子もない考えだが、他に今のこの状況を説明できるものはない。

・・・これは、確認する必要がある。

「あの、ちょっと質問いいですか？」

そう言って新八は目の前の銀時と神楽に拳手してみせる。

神楽と顔を見合わせてから、銀時が

「何かな、志村弟君」

と、指名する。

「あの、ここは一体どこですか？」

「あ？だから、さっき言ったでしょ、ここは・・・」

「いや、そうじゃなくて・・・」

学校の裏庭とかそういうんじゃないかと、所在地とか、そーいうことを聞いているんですよ

（ま、この二人だし、こういう反応が返ってくるのは分かってたけどさあ・・・）

そう新八が訂正すると、「なんだそんなことか」と言って銀時が説明し始めた。

「ここは宇宙中の銀河系のはずれの太陽系第三惑星が地球の日本の東京新宿は歌舞伎町にある銀魂高校よ」

と、ここまでほとんど息継ぎもせず一息に喋った銀時は、最後に「

OK?」と付け加えてきた。

いや、そうじゃなくて・・・とは思ったが、とりあえず、やはり今まで自分がいたところとは微妙に違うらしい。

・・・と、というかホントの歌舞伎町に学校なんぞあるのかね？

「じゃあ、あの・・・貴方達と僕はどついう関係ですか？」

この質問にはさしもの銀時と神楽も「はあ？」と呆れ顔である。

「お前、ホントに頭おかしくなつたんじゃねえの？」

「いいから、早く答えてくださいよ」

訝る銀時たちに新八は答えを促す。

その様子があまりにも真剣そのものなので二人は渋々、だが真面目に答え始めた。

「オメエはあれよ、ここん生徒で、俺はその担任」

と、銀時は頭を掻きながら答える。

なんでこんなこと説明しなきゃなんないんだ？みたいな顔をして。

「神楽ちゃんは？」

「ただのクラスメートアルヨ」

尋ねた新八に、神楽は酢昆布をクチャクチャやりながらめんどくさそうに答える。

なんだろ・・・なんでこの人たちこんなに気だるいんだ？なんかやりにきーよ

つか銀さんが担任！？ありえねえっ！！つか、嫌だっっ！！！！

などと考えつつ、とりあえず新八はひとつの結論に達した。

「あの・・・これから言うこと、ちょっと冷静に聞いてください」

「あ？なんだよ」

新八の言葉に銀時と神楽はだるそうにしながらも次の言葉を待っている。

「じゃあ言いますけど・・・」

新八はそこで一旦言葉を切ると、軽く息継ぎをして次の言をつなげた。

「僕は貴方達の知っている志村新八じゃありません」

2・異変(後書き)

3Zは多分にオリジナル設定になっていくと思います・・・^^;

3・異邦人（前書き）

第2話と第3話、タイトルが微妙に被ってる・・・。

3・異邦人

再び冷たい風が三人の間を駆け抜けていった。

日が暮れて、更に気温も低くなったようだ。

先程は嘘のように淡い色の花弁を散らしていた大木は、今は元の寂しい姿をさらしている。

「えっと・・・何言ってるの、お前」

あまりに突拍子もない、というか意味不明な台詞を吐く少年に、銀時はただ呆けたように問い返すしかなかった。

「だから、僕は貴方達が知ってる新八じゃないんですってば」

同じこと二回も言わせないで下さいよ

と、いつも通りの小言を言いながら、目の前の助手であるところの少年は溜息を吐いた。

そう、いつも通りなのだ その身に纏っている物以外は

目の前の新八は現在、先程までの白と青の袴姿ではなく黒くて首がぎちぎちの軍服みたいな

いわゆる学ランを着ている。

「とうとう頭まで駄目になったアルか、この駄眼鏡が。冗談は寝て

言えアル」

いや、それなんか色々混ぜてるから・・・つか、駄眼鏡って何だよっ！！！！

と、一通りツッコむと新八は話し始めた。

「まあ、正確に言つとこの世界の新八じゃないってことになりますかね」

「は？だからお前、さっきから言ってることがよくわかんねえよ」

一向に要領を得ない新八の話にイラついて銀時は眉根を上げる。神楽も不思議そうに首をかしげている。

そんな二人を交互に見比べた後、新八は続ける。

「二人とも、パラレルワールドって知ってます？」

「パラソルワイルド？なんじゃそらヨ」

「あれじゃねえかお前、それ、新しいパフェの名前だよ、たぶん」

「そうじゃねえっつっ！！！！」

見当はずれなボケをかます銀時と神楽にツッコみつつ、新八は話を進める。

「パラソルでもパフェでもなくてパラレルワールドです！

よく漫画とか映画とかで出てくるでしょう？今自分のいる世界と似

てるけど違う世界。
異世界とか平行世界とも言いますが」

「つか新八。お前その台詞、一部どっかからパチってねえか」

まあ、いいやね。

と言って、銀時は頭を掻く。

「んで？結局お前は何が言いたいわけ？」

そう疑問形式で訊いているが、おそらく銀時はすでに新八が何を言おうとしているか分かっているのだろう。

話の先を促すように、次の新八の言葉を待っている。

「ようするに、僕は新八は新八でも貴方達にとっての平行ワールドの志村新八だったことですよ。逆に言うと、僕としては平行ワールドに来てしまったってことになりますけど・・・」

律儀にも平行ワールドから来たという新八は、銀時たちと自分の立場両方から見た結論を語って聞かせた。

しかし最後の方は少し困ったように言い、口をつぐむ。

当然だろう、何しろアナザーワールドにいるのは自分なのだ。すると、銀時のまるで緊張感のない声がした。

「ってオメエ、もうパラレルワールドから来たこと決定みたいになっちゃうてるけどさ、あれよ？異世界だのなんだのってーのは、結局は作り話なわけよ。オメエ、ちっとジャンプの読みすぎなんじゃねえの？」

男の夢だかロマンだか知らなーけど、さっきの眩しいので目だけじゃなくて頭もやられちゃったんでねえの？

そう、銀時が新八の話を鼻で笑った直後。

ドガッ！！

銀時は後頭部に強烈な蹴りを食らった。
更に立て続けに二・三度殴られる。

「痛ってーな、何しやがるっ」

さしもの銀時も涙目である。

恨みがましそうに神楽を睨みつけると、平然とした顔でこう返された。

「痛いってことは夢じゃないネ。多分マロンとも違うアル」
「いや、マロンじゃなくてロマンね。てか神楽ちゃん、ちよっとやり過ぎじゃ……」

焦ったように仲裁に入った新八は、一通り二人を宥めるとまた困ったように言った。

「・・・でも、困ったな。ここがパラレルワールドだとしたら・・・僕、どーやって元の世界に戻ればいいんだろ・・・」

そう、ここがパラレルワールドだと分かっただけでは意味がないのだ。

何しろ、何が原因でこうなったのかも分からないのだから、戻り方が分かるはずがない。

新八は途方に暮れる。

「あー、まあなんだな。とりあえず・・・家に帰えるか」

困り顔の少年を見て、銀時は頭を掻きながらこう声をかけるしかできなかつた。

3・異邦人（後書き）

早期更新はここまで。

次回からは週1くらいのペースで行くと思います・・・

4・帰る場所（前書き）

おはようございますorrこんにちはorrこんばんは。 殷樹です。

1週間ぶりの更新になります。

こんな駄文でも読んでくださってる方がいるみたいなので密かに喜んでおります。

4話目もよろしければ見てやってください！

4・帰る場所

茜色がすっかり西に沈みきった頃、アンニュイな感じで住宅地を往く原チャリが一台。

運転手はノーヘルで独特の銀髪を振り乱し、こんなんに運転を任せて大丈夫なのかというような死んだ魚のような目で前方を見据えている。

口には、相変わらずのくわえ煙草、である。

後ろの荷台には、こちらはヘルメットをしっかりと被った少年が、なんだか時代錯誤な青い袴の裾をはためかせながら乗っている。

そして、その銀髪の男はとあるぼろアパートの前で車を止め、後ろの少年にも降りるように促すと、さっさと中に入っていく。

少年もその男に遅れないように後からついて行く。

二階建てのぼろアパートの最上階、階段を上がって一番奥の部屋の前まで行くと、男は鍵束をポケットから取り出しガチャガチャとやり、ドアを開ける。

そして後ろの少年に再び身振りだけで中に入るように促すと、自分はさっさと靴を脱いで部屋に上がりこんでしまった。

少年も渋々後に続く。

しかし、彼の内心は穏やかなものではなかった。

（はあ、なんでこーなっちゃったんだろ・・・）

時は30分程前に遡る。

新八は今の自分のいる場所の不自然さや銀時たちの話から、自分が現在パラレルワールドにいると確信した。

普通に考えればそれこそおかしな話で、夢かなんかかと考えるのが一般的なのだろうが、先程銀時にはたかれたときに普通に痛かったので、夢ではないと思われる。

「・・・でも、困ったな。ここがパラレルワールドだとしたら・・・僕、どーやって元の世界に戻ればいいんだろ・・・」

自論の正しさよりも、今はこれからどうするかの方が問題である。しかし、元の世界への戻り方は分からないし、この世界にも頼れる場所などない。

新八は途方に暮れる。

「あー、まあなんだな。とりあえず今日はもう遅いし・・・帰るか」

銀時のだるい、しかしどこか新八を気遣ったような言葉がかかる。

「つー訳で神楽。お前ももう帰れ。一応女なんだから、あんま遅いと色々問題だから」

「はいヨー」

少々引つかかる言い方だが、神楽は特に何を言うでもなく素直に銀時の言葉に従いその場を後にした。
そんな神楽の背中を見送ると、銀時は新八の方に向き直った。

「よし。んじゃ、俺らも帰えるぞ。志村弟」

「・・・いや、帰る帰らない以前に、僕この世界じゃ帰るところすらないんですが・・・」

パラレルワールドから来たっぽいって言ったでしょ！人の話聞いてました？！
なんて小言を軽くスルーして、銀時はなんでもないことのように新八に言った。

「ん〜、んじゃとりあえず・・・俺ん家来れば？」

と、そんなこんなで現在に至るのだが。

(泊めてもらえるのは正直助かるんだけど・・・でも・・・)

ハア・・・と、新八は溜息をつく。

そんな彼の様子に気付いているのかいないのか、銀時はいつもの何を考えているかよく分からないような声で

「まあ、とりあえずテキトーにその辺座ってな」

と、勧めるが

「って、こんなとこ座れるかー！っ！てか、座るスペースがそもそもないじゃないっすか！！」

そう。

四畳半ほどの銀時の部屋は、雑誌だのカップ麺のクズだの畳んでない洗濯物だのなんだのが所狭しと散らかっていて、ぶっちゃけ足の踏み場もないほどである。

・・・よくこんなところで生活してられるな。

「いちいちうるっせーなあ。その辺のもんテキトーにどかしてスペースなり何なり作りゃいいだろうが」

そう言いながら黒い上着を脱ぎ、ネクタイと眼鏡をはずすと、銀時

は奥に引っ込んで行ってしまった。
後には新八ひとりが残される。

「ったく、しょーがないなー・・・」

とりあえず、テキトーに座つとけと言われたので素直に言われた通り座つとくことにする。

しかし・・・

(うーん、なんか落ち着かないなあ・・・)

その生真面目な性格からか、はたまた万事屋で日々家事手伝いみたいなことをしているためなのか、新八はただ座っているだけというのがなんだか慣れない。

と、というかこの部屋の散らかり具合が気になって仕方がない。

そんな感じで新八が悶々としてみると、部屋の奥のほうからトントントント、と小気味いい包丁の音が聞こえてきた。

どうやら銀時が夕飯を作っているようである。

普段やる気のない男だが、ド器用なので料理などホントは朝飯前なのである。

・・・今は夕飯前だけ。

(うーん、人ん家のもん勝手に動かしちゃイカンとは思っけど、でも・・・)

あの銀さんのだし、いいよね?!

と、いうわけで、新八は手元のジャンプの山に手をかけた

4・帰る場所（後書き）

はい、まだまだ続きます。

つか、全然話が進まないですね。更新も話の進み具合も亀の歩みです^^；

今回は銀八先生ん家捏造でした。

3Zはオリジナル要素満載でお送りします（多分）。

ちなみに、今回のタイトルは結構難産・・・というか全然気に入っておりません。

良いのと思いついたらこっさり変えるかもです・・・；

5・甘口カレー（前書き）

どうも、1週間ぶりです！

毎日暑い日が続いています。皆様いかがお過ごしでしょうか？
適度に水分を取って、食欲なくても程よく食べて、この猛暑を乗り
切りましょう！！

と、言うわけで（どういうわけ）第5話です

5・甘口カレー

そんなこんなで帰宅した万事屋一行は現在夕食タイムである。本日の当番は銀時。

メニューはカレーである。ちなみに甘口。

「へー、先生って料理できたんですね。甘口だけど」

新八 from パラレルワールドが感心したように言う。

「でも甘いカレーなんて邪道ですよ」

などと言いながらも、食は進んでいるところを見ると、結構お気に召したらしい。

と、そんな新八をいつもの濁った目で見ながら、スプーンを口にくわえつつ銀時が尋ねた。

「さっきから気になってたんだがよお・・・その“先生”って何よ」

すると新八は一瞬きよとん、とした顔をした後、ああと納得したように答えた。

「そっか、こつちの世界じゃ先生は先生じゃないんですもんね。

先生ってのはあれですよ、学校の先生です。高校の」

ちなみに僕の担任なんですよ
などと、あつけらんかと話す少年とは対称的に銀時と神楽は目が点
である。

「ってことは何か、俺は教師でお前はその生徒ってわけか?!」

「そうですよ」

「銀ちゃんが学校の先生なんてありえないネ。もしホントにあったら天ぷら蕎麦が起こるヨ」

「・・・あ、それって天変地異のこと?」

「だよなーありえねえよなー、だって俺学校嫌いだもん。特に文
化祭」

そう言って心底嫌そうな顔をする銀時。

・・・どうでもいいけど、お前学校行ってたのか?

「あゝ・・・なんか向こうの先生もそんなこと言ってました・・・」

何か思うところがあるのか複雑な顔をして新八が言う。

「あー、とりあえずここにいる間はその“先生”での止めな。しっ
くりこねーから・・・」

そう言いつつ食を再開する銀時。

そんな銀時にすかさず新八が尋ねる。

「じゃあ、なんて呼べばいいんですか？てか、こっちの僕はアンタのことなんて呼んでたんです？」

坂田さんとか、銀時さんとか？

と新八はありえそうな呼び方を列挙している。

・・なんとなくしっくり来なさそうな顔をして。

「あゝ別に普通に・・銀さんって呼んでたけど」

・・・・・

それを聞いた新八はしばらく沈黙する。

そしてプツ、と噴出したかと思うと手で口を覆って笑い出した。

一応遠慮はしているようだが体が小刻みに震えている。

「・・・っ、あっはっはっ、ぎ、銀さん”?!ははは・・」

とつとつ声を出して笑い始めた新八に銀時は眉を顰める。

「おまつ、ちよつ、何笑つてんの!？」

「あっはっは、す、すみません・・な、なんか」

ひとしきり笑った後、新八は目に溜まった涙をふきふき答えた。

「銀さん」だなんて、なんか某町奉行の名前みたいで・・・似合わない！あれ？でも意外としつくり来るかも・・・」

銀さん、銀さんね・・・

そうつぶやいて、新八はまたひとしきり笑う。

そんな新八の態度が面白くないのか、銀時は眉を顰めたまま訊き返した。

「・・・じゃあお前、どんな呼び方だったらいいってんだよ」

「ふふ・・・そうですね、僕らは先生のこと、こう呼んでましたけどね」

5・甘口カレー（後書き）

はい、まだまだ続きます。

ちなみに殷樹はカレーは中辛くらいが好きです（聞いてません）。

相変わらず話進まない上にギャグが面白くなってすみません・・・

；

もっとギャグのセンスと文才がほしいです・・・。

ではでは、また次週、第6話でお会いしましょう

6・"銀八 先生（前書き）

中京圏はあいにくの雨ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

このまま一気に涼しくなってしまうのでしょうか・・・暑すぎるのも嫌だけど、早々に秋に突入してしまうのもなあ・・・と、ちょっと複雑な気持ちです

そんなこんなで（？）第6話をお送り致しますう〜。

6・"銀八先生

「銀八先生？」

なんやかんやで銀時の家に泊まることになった新八は、手持ち無沙汰なのであまりに汚い彼の部屋を片付けていた。そこへ銀時が出来上がったカレーと水を持ってやってきたのでそれを食し終わり、現在二人は一服モードである。

「そ。ガキ共はみんなそう呼んでるぜ」

タバコの煙を燻らせて、銀時は少し得意そうにそう言う。上着とネクタイを取ったというだけで後は帰ってきたときのままの格好の銀時を見て

(着替える位したらいいのに・・・)

と思う新八ではあったが、たぶんこの人のだらしのなさと面倒臭がりさは次元が変わっても同じだろうと思ひ、別のことを口にする。

「なんなんですか、その“銀八”先生ってのは」

銀は分かるけど、“八”ってなんだ“八”って！
と、自分も新“八”であることを棚に挙げて、新八は内心ツッコミ

を入れる。

“八”の出所がわかんねえよ。

そしてこの人がなんでこー、ちょっと得意そうなのかもわかんねえ！

「何ってお前、知らないの？某学園ドラマの主人公の国語教師から取ったんだよ、たぶん」

俺って生徒からの人望厚いからねえ」

とかなんとか言って、銀時はその某学園ドラマの主人公について一通り語り出した。

それを聞いて新八が思ったことは

(たぶん、違う理由なんだろうな)

ということだった・・・

「そういえば、志村弟お」

出し抜けに銀時が声をかけてきた。

いつもと変わらないだるそくな声だが、先程とは微妙に感じが違う。一応、何かまともなことを言おうとしているときの声だ。

「なんですか、銀さ・・・銀八先生」

いつもの癖で「銀さん」と言いかけた新八だが、なんとなく紛らわしいので律儀にも言い直してみる。

一方そう言われた銀時の方は、それについては特にコメントするとなく次の句を告げる。

「お前さ、これからどうすんの」

「どうするって・・・」

「だからさ、元の世界に戻らなくていいわけ？」

そう、今新八が一番に考えなければいけないことは元の世界に戻る
ことである。

しかし・・・

「もちろん元の世界には戻りますけど・・・何をどうしたらいいものやら・・・」

元の世界に戻ろうにも、どうしたら戻れるのかが分からないのでお
手上げである。

しばらくの沈黙の後、銀時がいつも以上のけだるさでさらっと言っ
てのけた。

「あゝ・・・とりあえずお前、明日はこっちの志村弟の代わりに学校
来い」

「……………え？」

一瞬、何を提案されたのか分からなかった新八は変な声を出してしまった。

学校って、つまり……………

「こっちの“志村新八”として、授業を受ける、と…？」

「そ、さすがにアイツも異世界にいるあいだに無断欠席扱いはカワイソウっしょ」

いつもの銀時からは想像もつかないような、至極真面目な意見である。

思わず新八は瞠目する。

やっぱり同じ人物とはいえ、立場が変われば、という奴であろうか。
…少し見直したかも

「別に学校に行くのはかまわないですけど……………」

「でーじょーぶだって、1日や2日入れ替わってたって誰も気付きゃしねーって。

お前、地味だから」

……………前言撤回。やっぱり銀さんはどうあっても銀さんである……………

「……………絶対元の世界に戻るまでつき合わせるからな、この白髪

パーマっ
」

憤る少年を窓外の紅月だけが妖しく見つめていた

6・"銀八先生（後書き）

はい、以上で第6話おしまいです。

相変わらず32は捏造満載ですね！

ウチの銀八先生は本名は「坂田銀時」で「銀八」はあくまでもあだ名です。

やっぱり「八」は新八と眼鏡の8ですからね（笑）

ではでは、相変らずの駄文ですがここまで読んでいただきありがとうございます！！
うございます！！

次回も期待せずにお待ち頂けると幸いです^^

7・夢は現（前書き）

夏休みももうすぐ終わりですねえ。皆様いかがお過ごしでしょうか？

殷樹は年甲斐もなくビーチランドなんぞに行ってきましたよ！

やっぱり海の動物達には癒されますねv

さて、どうでもいい近況報告はここまでにして、「繋がる世界」第2章スタートです！！

7・夢は現

見上げる空に浮かぶのは澄んだ青と白い雲、そして空飛ぶ異人の船
昔は嫌悪を覚えたけれど、今ではすっかり当たり前の光景
白刃を振り上げ、紅に染まった頃もあったけれど

今は

このぬるま湯のような日常に埋もれていたい
コイツ等と

ぼんやりと目を開けると、そこには見慣れた薄灰色の小汚い天井。
窓の外からは朝日が差し込んでいる。
いつもの朝の光景。

が。

「あ？」

これは・・・

トトトトツ、とまな板を叩く音に、味噌汁の匂い・・・

「あ、やっと起きました？銀さ・・・銀八先生」

と言つて台所から顔を出したのは見慣れた黒髪の少年。

志村新八。

銀時の担任しているクラスの生徒である。

「あ・・・あれ？・・・」

「起きたんならさっさと顔洗つて着替えちゃってくださいよ。もうすぐ朝食できるんで」

そう言つて新八は再び台所にひっこんでいってしまった。

一方銀時は起き抜けで回らない頭をフル回転して、現在の状況を理解しようとしていた。

(あゝそっか、確か昨日・・・)

ぼんやりと先日あったことを思い出してきていた銀時だが、傍から見ればボーっとしているようにしか見えないため、

「ちょっと、ぼさつとしてないでさっさと洗面所行ってくださいよ
っ」
などというお言葉をいただいでしまった

その後も新八になんやかんやと言われ、渋々支度をした銀時は、現在食卓についていた。

本日の朝食はご飯に味噌汁、煮豆に生卵といった、これぞ日本の朝ごはん的なメニューである。

ちなみに悲しいかな、朝から焼き魚が食べられるほど銀時の財布事情はよろしくない。

新八はそれを知ってか知らずか、必要最低限のもので朝食を作った。
・・・意外と、できる。

と、銀時がつらつら脈絡も無く考えていると

「・・・あの、冷蔵庫の中のものとか勝手に使っちゃったんですけど・・・大丈夫でしたか？」

違う次元から来たとはいえ、とてもティーンエイジャーとは思えないような発言。

内心苦笑しつつ銀時は答える。

「いんや、へーキ、へーキ。・・・それより新八、お前意外と料理上手いのね」

「割と死活問題でしたから・・・あっ」

そこで何を思ったか、新八は急に声を上げた。

そしてなんとなくひとりですつきりしたような顔をしている。銀時とはいえば、そんな様子を見ていれば訝しく思うわけで、

「なんだ、どうかしたのかよ？」

と尋ねる。

しかし、その間も箸は進む。

「あ、いえ、別に・・・」

新八は少しバツの悪そうな顔を見ると俯いて再び茶碗に向かい始めた。

心なしか照れているようにも見える。

「んだよ、そんな反応されたら気になるだろうが」

そう言って、暗に先を促すような目線を送ると新八は案外素直に理由を話した。

「いえ、あの、別にたいしたことじゃないんですけど・・・
こっちに来て初めて呼ばれたなあと思って、名前」

ずっと“志村弟”だったじゃないですか
と言ってごまかすように笑う。

「あー、そうさなあ」と興味なさ気に言いつつも、銀時は内心意表
を突かれていた。

別に新八を名前で呼んだことが今までに一度もなかったわけではな
い。

彼には姉がいるために、むしろ名前で呼ぶことの方が多いくらいで
ある。

しかし、新八一人の時は大抵「志村」か「志村弟」と苗字で呼ぶよ
うにしていた。

教師と生徒だからというのもあるが、基本的に銀時は人との必要以
上の接近を嫌う。

名前で呼ぶことは相手に一歩近づくような感じがしてしまうため、
極力避けるようにしていた

「・・・あのね、俺は別にいつつも苗字で呼んでるわけではないんで
すよ新八くん」

内心の動揺を隠すために、銀時は軽い調子で言う。
視線は相変わらず朝食に向いている。

「はあ、そうなんですか・・・じゃあ普通にいつも名前で呼べばいいじゃないですか」

新八は銀時の微かな動揺には気付いていないのか、純粹に小首をかしげている。

銀時は白米を口に含んでもごもごやってから、いつもの気だるそうな感じで答えた。

「ん〜・・・いや、やっぱりお前の姉ちゃんとかやこしいってのもあるし・・・あれだ。

なんかこゝ苗字で呼んでた方がなんか教師って感じじゃん」

こう言った銀時に、もはや先ほどの動揺はなかった。

一方、それを聞いた新八は少し呆れているようである。

伝家の宝刀であるツツコミすらしないで朝食に意識を戻した。

食事が終わると、新八は食器を流しに出し、水に浸すと、学校に行くために玄関に向かった。

靴を履いていると（これが草履と違って履きにくい）、
バフオツ

遅れて出てきた銀時に無理やりヘルメットを被せられた。思い切り。

「痛ったつ！ちょっと、何するんですか?!」

涙目で抗議する新八に銀時は取り合わずに言う。
煙草に火をつけて一言

「送っちゃる」

スクーターのメーターは60キロぐらいまであるのが普通だが、法定速度は30キロである。

なんで出せもしない速度までメーターがあるのかは謎だが、そんなことはともかく。

現在銀時のスクーターは法定速度よりやや速気味で走っていた。

今年はどうやら暖冬となる見通しだが、やはり11月ともなると空気が凜とし、風は冷たくなる。

(こっちも季節は同じくらいなんだな)

などと銀時の背中で新八は考えていた。

学校に向かう土手、時間が少々遅いためか(仮にも銀時は教師であ

るのに（学生服やセーラー服はまばらで、向かって左手に見える河川敷も、右手に見える住宅地も朝のラッシュ時間を過ぎたのどかさ
が漂っていた。

冬の寒さとのどかさ

まるで目の前の人のようだとは何か感じた。

いや、正確には目の前の人、ではなく目の前の人と同じだけど違う、
元の世界のその人であるが

つらつらと取りとめもないことを考えているうちに学校に着いた。
新八は慣れない環境に内心ドギマギしているものの、律儀にお礼を
言って、銀時から離れようとした。
すると

「なあ
」

新八は振り返る。

と、日光の下できらきら輝く銀髪を風に揺らしながら、男はスクー
ターから降り、こちらに向き合って立った。

どことなく真剣な色の瞳で

「お前にとって、万事屋は、何？」

生徒達の喧騒の中に、始業前の予鈴が鳴り響くのが聞こえてきた

7・夢は現（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか、第2章第1話。
ここまで読んで頂き、ありがとうございます！

さて、毎度のことですが各話の題名を考えるときに悩みます。
全体の内容を短い言葉で表すのって難しいですね。<
もっと語彙力とネーミングセンスがほしいです・・・。

8・"嵐（前書き）

おはようございますorrこんにちはorrこんばんは。

もう9月ですねえ。この小説を投稿し始めて早1ヶ月になります。

これも読んでくださる皆様のお陰です！

今後とも「繋がる世界」をよろしくお願いいたします。

「え？」

今日何度目か分からない疑問符をもらす。

振り返ると相変わらず濁った眼をした天パがだるそうにこちらに視線を向けてきた。

どつかりとソファーに座り込み、膝の上には愛読書、もとい週刊少年ジャンプが開いたまま乗っている。

「だから、お茶ちょーだい。新八くん」

さも当然といったように自分にお茶を要求する目の前の銀髪の男、坂田銀時。

新八の学校の担任・・・ではなく、(一応)仕事先の上司である。
・・・“こつちの世界”では。

「はあ・・・」

仕方なく今日何度目になるか分からない生返事を返すと、新八は台所に向かった。

勝手の分からない台所で、しかし割とあっさり茶を入れ、居間に運ぶ。

「はい、どーぞ。っていうか、そんなにゴロゴロしてるくらいなら自分で入れりゃいいのに……」

再びジャンプを読み始めていた銀時の目の前に彼の湯飲みを置き、自分の分、それと頼まれてもないのに隣に神楽の分を置く。

「おー、どーも」

ワントンポもツーンポも遅れて返事をした銀時だが、視線はジャンプに向けたまま、しかも頼んでおいてお茶には手をつけない。
……猫舌かな、とわけの分からないことを考えてみる新八。

そして部屋の隅で白い巨大な愛犬・定春とじゃれている神楽にも声をかける。

「神楽ちゃん、お茶入れたからよかつたらどうぞ」

「おお、さっすが、パラソルから来ても駄眼鏡アルな。気が利くアルネ」

そんなわけの分からない毒舌を吐きつつも、神楽は素直にソファに座って、茶を啜り始めた。

「……だから、駄眼鏡って何っ！てか、それ褒められてんだか貶

されてんだかわかんないんだけど!!」

と、一通りツッコミを入れると新八は自分も茶を啜る。

そうしつつも目の前の男や隣の少女、窓際で丸くなっている白犬やその他家の中を一通り見回して、小さく溜息をついた。

(ホント、こっちの僕ってここで何やってたんだろ・・・)

朝、うとうととしていたら神楽に飯を作れと叩き起こされた。

「何で僕が?!」と抗議したら「今日は新八の当番だから」と返され、有無を言わず朝食を作らされた。

何でよそ様でおさんどんしなきゃなんないんだ、とか考えながら食事をしていたら、さっさと食べ終わった神楽と、寝起きでまだぼんやりしている銀時に食器洗いも丸投げされた。

更に、洗い物を終えて居間に出て行くと、ソファでジャンプを読んでいた銀時に「洗濯終わったみたいだから干しといて」と、これまた有無を言わず押し付けられ、更には朝の散歩を終えて帰ってきた定春を神楽が足の裏を拭かずに家の中に入れてしまい、その後片付けを先程までしていたのだ、新八 ひとりで

(僕、ここの従業員なんだよね?家政夫とかじゃないんだよね?!)

・・・)

と、ひとり心の中で嘆きながら、ふと、さつきから疑問に思っていたことをなんとなく目の前の男に聞いてみる。

「あの、朝からずっとゴロゴロしてばっかですけど・・・仕事は、しなくていいんですか・・・銀さん？」

一瞬しんとする部屋。

なんとなくバツの悪い思いの新八だが、次の銀時の言葉にその思いは一瞬で掻き消えた。

「ああ、いーのいーの。依頼もこないのに仕事なんて、この寒いのにやってらんないし・・・」

「それに俺、今十分忙しいから」

とか何とか言っつて、再びジャンプに目を落とす白髪パーマ。

・・・こりゃ、冷蔵庫の中も空なわけだよね・・・

「はあ・・・」

再び新八が溜息をついたとき、家の外が何やら騒がしくなってきた。最初は地響きのようなものが遠くから聞こえ、だんだんところどころに

ぐはあつつつ！！！！

言い訳をしようとした銀時は、しかし次の瞬間、お妙に問答無用でボッコボッコにされた。

・・・瞬殺である。

「ね、姉さん、とりあえず落ち着いて！そのままじゃせんせ・・・じやなくて、銀さん死んじやいますよ・・・！」

それを見ていた新八（fromパラレルワールド）はおろおろしつつも鬼神の如き姉に制止の声をかけた。

そこでようやく冷静になっただけらしい妙は弟の方を振り返ると、少し不思議そうな顔をして小首をかしげた。

その顔は、もはや先程までの鬼ではなく、普段の美しい姉の顔だった。

「あらごめんなさい私っただらっつい・・・それにしても、新ちゃん今なんて言ったの？」

「え？」

予想外の妙の反応に新八はすぐに何を聞かれているのか分からなかった。

自分は何がおかしなことを口走っただろうか・・・

すると、妙はそんな新八の心の声に答えるように言葉を続けた。

「新ちゃんに『姉さん』なんて呼ばれたのは始めてね」

そう言っただけで少し困ったように微笑む。

「あ・・・」

よく分からないが、自分は失敗したらしい。

こちらの自分は妙を「姉さん」とは呼んでいなかったようだ。

「い、いや、それは・・・その・・・」

なんと行って言い訳しようかとあたふたとなっている新八を神樂がつつき、小声で言う。

「新八はアネゴのこと『姉上』って呼んでたアルヨ」

「あ、そうなんだ・・・」

神樂の親切に、こちらでも小声で返すと新八は姉に向き直った。

別に姉である妙には現在の状況を説明してもよいのだが、面倒くさいし、何より下手をしたら自分たちの命に関わると、銀時たちに口止めされていたのだ。

それ故、新八は何か上手い言い訳を考えなくてはならない。

「・・・き、昨日とある寺子屋から読み聞かせの依頼があつて練習してたんですけど、その本の中で『姉さん』って台詞が異様に多かったもので・・・スミマセン・・・“姉上”」

これを聞いた神楽といつの間にか復活していた銀時は

（なんじゃそりゃーっ?!）

（そんなんじゃすぐにバレるって!つくならもつとましな嘘つけゴルアツ!）

と、内心気が気でなかったのだが、

「あら、そうだったの。いやだわ、もうなんだかビククリしちゃった!」

キレ者のくせに変なところで鈍感な妙はこの新八の話でどうやら納得したらしい。

その後も新八と一言二言話をすると、

「じゃあ、お仕事頑張つてね」

と言つて、何事もなかったかのように万事屋を後にした。

それを見送つた万事屋三人は

「あ、嵐だ・・・」

示し合わせたように呟いた

8・"嵐（後書き）

はい、と言うわけで今回はコレにて終了です。
今回も相変わらずの捏造設定でした。

ウチの3Z新八はお妙のことを「姉さん」と呼んでいます。

でもこれ、一応「小説・3年Z組銀八先生 第1巻」リスペクトな
んですよ^^

ちなみに、いつもは日曜日になっている更新ですが、今回は少し早め
にお送りしております。

実は次の日曜日は家族で旅行に行くもので・・・先んじての更新に
なります！

次回からはまた今まで通り日曜日の更新になると思いますので、ま
たよろしければ次回も見てください。
では。

9・銀魂高校（前書き）

お久しぶりです！

前回更新が先々週の金曜日だったので1週間とちょっと、更新して
いないことになりましたかね？

まだまだ残暑が厳しいですが、風邪等ひかないよう気をつけましょ
う！

ではでは、繋がる世界第9話、スタートです。

9・銀魂高校

「あ、嵐だ・・・」

銀時と別れ、彼に教えてもらった昇降口に向かっていった新八は、目の前の状況に思わずそう呟きをもらした。

つい先程、遠くから地響きが聞こえたと思い、振り返ろうとすると、それよりも早く地響きが近づいてきて、何か白くて巨大なものがそばを通り過ぎて行った。

周りの人間はほとんどが風圧で飛ばされ、あるいは遠くから啞然として“それ”を眺めていた。

「よし定春、ごころーアル」

そう言っつてその白い巨大なもの、もとい巨大な白犬・定春から降り、撫でているのは中国からの留学生・神楽である。

彼女は定春に何やらご褒美の餌を与えると、彼がどこかに行くのを見送って、その後は周りの状態も省みず、さっさと昇降口に入っていく。

その一部始終を茫然と見ていた新八だが、あることに気がついて彼女に声をかけた。

「神楽ちゃん」

「ああ、地味な駄眼鏡アルか。おはよーアル」

振り返った彼女は、相変わらず酢昆布をくわえていたが、昨日かけていた牛乳瓶底眼鏡は今はずしていた。毒舌も相変わらずである。

「だから駄眼鏡って何……っ」

相変わらずの言われように少しイラっときた新人だが、今更か、と考え直す。

このチャイナ娘の毒舌は今に始まったことではない。ひとつ溜息をついて気を取り直し、言う。

「おはよう、神楽ちゃん。・・悪いんだけどさ、僕の下駄箱ってどこ？」

「……は？」

神楽は一瞬わけが分からない、といった顔をした後、訝しそうな目を新人に向けてきた。

そりゃまあ、いつも使っている自分の下駄箱の位置を聞いてきたらそくなるよな、普通。

でも……

「神楽ちゃん、もしかして昨日のこと忘れちゃってる？」

「それとも夢だとも思ってた？」

新八がそう尋ねると、しばらく思索した後、ぼんっ、と手を叩いて

「ああ、お前っ！・・・そーアル、じゃお前まだパラソルワイルドの新八アルか」

ようやく昨日のことを思い出したようである。

「まだ戻れてなかったアルか、やっぱ駄眼鏡アルな」
などと言って妙に納得している神楽に青筋を立てつつも、

「いや、“パラソルワイルド”じゃなくて“パラレルワールド”ね！・・・つか、パラソルワイルドって何っ・・・」
「おめーの下駄箱はそこアルヨ」

そんな新八のツツコミをもともせず、神楽は先程の質問に答えた。
「ああ・・・ありがとう」

と、結局は律儀に礼を言いつつ、新八は上履きに履き替えた。

そんな自分を酢昆布をくわえながら見ている神楽に気がついた新八は

「ん？何、神楽ちゃん」

と、いつもの感じで保護者よろしく尋ねる。

神楽はもうここに用事はないはずだが・・・

「何、って、お前を待ってるアルヨ」

「へ？なんで・・・」

思いもしなかった神楽の返答に思わず間拔けな声を出してしまふ。
そんな新人を見て神楽は少し呆れたように言った。

「お前、教室の場所分かるのかヨ・・・」

「あ・・・」

（そういえば、銀八先生に昇降口の場所は教えてもらったけど、教室の場所は聞きそびれてたんだ・・・神楽ちゃんって時々鋭いところ突くよね・・・）

などと、新八が心の中で呟いていると

「それじゃあ早くするネ、駄眼鏡！遅刻するアルヨッ」

「あっ、うん！」

その神楽の声に若干照れが含まれていたことは、気付かない振りをしてあげた

「へー、じゃあ銀八先生のあだ名はその某ドラマの主人公からきて

るわけじゃないんだ・・・」

「ソーアル、銀八の“八”はパチモンの“パチ”アルヨ」

あのギタータラな駄目教師にはお似合いネ
という神楽に新八は苦笑してみせる。

いくらギタータラな駄目教師でも、仮にも自分の担任にそこまで言う
のはどうなのかと、彼の良心が言っている。

二人でつらつらとそんなことを話しているうちに4階 三年生の教
室のある階 にたどり着いた。

この階の東の一番端が3年Z組の教室である。

「ソコアル」

そう言っつて神楽は3-Zの教室の前で一度立ち止まった。
が、神楽は一向に教室の中に入ろうとしない。

「どうしたの？神楽ちゃん」

「入らないの？」

そう言いつつ、ドアに手をかける新八。

そしてドアを開けた次の瞬間

ぼふっ

「って、なんじゃこりゃあっ?!?!」

自らが開いたドアのところで白い粉を髪に纏って突っ立つことになった。

傍らの床には黒板消しが・・・

咄嗟に神楽を見ると、「プププツ」といった感じでニヤケている。

そして教室の中からも笑う声あり、驚きの声ありといった風である。

「馬鹿アルなー、それは銀ちゃん専用のトラップアル。生徒は後ろから入るアルヨ」

「だからお前はいつまで経っても駄眼鏡アルヨー」

などと言って、さっさと後ろの入り口へ向かう神楽。

「だったら先に教えとけよっっ」

そうつツコみ、頭の粉を払いつつ、神楽に倣って後ろのドアから教室に入る新八だった

教室に入ると、新八はとりあえず神楽に（小声で）教えてもらった自分の席についた。

荷物を置き、椅子に座ると自然溜息が出た。

朝から疲れるのは向こうもこっちもあまり変わらないな・・・

そんなことを思っていると、後ろから聞きなれた声で話しかけられた。

「おはよう。昨日は大丈夫だった？新八」

その声に振り返ると、柔和な笑顔を湛えた姉が立っていた。

何故姉である妙が同じ教室に？とか、今新八って呼び捨てにした？とかいろいろ軽く混乱しつつも新八は表向きはいつも通り返事を返した。

「ああ・・・おはようございます。・・・はい、別になんとも・・・ただちよつと頭ぶつただけだったんで全然大丈夫でしたよ。心配かけてすみませんでした、姉上」

そう新八が言い終わった直後。

先程までにここにこと笑顔を浮かべていた妙の様子が一変した。何やら、俯いて、怒りで肩を揺らしているように見える。

「新八・・・今、なんて言ったの・・・？」

「え・・・」

どごおっ！！！！

次の瞬間、新八は腹に猛烈な飛び蹴り（二本足）を受けていた。

「テメエコラ何時代がかった呼び方してくれてんだあっ！あのゴリラの回しモンかテメエはあっつ」

そう言って怒り狂う妙の姿はまさしく夜叉・・・というか、もはや阿修羅である。

相手が実の弟ということも忘れて荒れ狂っている。

新八はいえ、姉の暴力には慣れているものの、何故これほどまでに怒り狂っているのか理解できない。

「あ、あの・・・」

新八が怒り狂う姉をなんとか宥めようとしていると、そこに聞きなれた馬鹿でかい声がかげられた。

「おはようございませつ、お妙さん！！いや、今日も相変わらずお美し・・・」

ぶべらっつっ！！！！

しかし、その声は最後まで紡がれることはなかった。

妙がその前に男の顔面に右ストレートを決めたからである。

「だから、テメーはその時代がかった呼び方止めろって言うてんだろーが！ア、アツツツ」

かくしてその後、妙の怒りの標的は自然ゴリラ・・・否、自称・妙の愛のストーカー近藤勲に移ったのであった。
なんとか難を逃れた新八は、目の前で繰り広げられる光景を茫然と見つめていたが、そんな新八に神楽が小声で教えるのだった。

「アネゴはあのゴリラのせいで時代がかった呼び方されるのが大ッ嫌いアルヨ」

だからお前は普通に「姉さん」って呼ぶヨロシ。
それを聞いた新八は、こっちでは絶対に妙を「姉上」と呼ばないよ
うにしよう」と心に誓った

9・銀魂高校（後書き）

はい、というわけで繋がる世界第9話はここまでです。

それにしても、前回からやっと万事屋以外のメンバーが出てきましたねえ^^

殷樹は基本万事屋スキですが、他のキャラもどんどん出していきたいと思っていますので、まだ自分のお気に入りキャラが出てきてないぞ！と言う方は気長にお待ち頂けると幸いです。

10・スナック「お登瀬」(前書き)

お久しぶりです、こんにちは。

ほんつとに残暑が厳しいですねえ〜。殷樹は昨日も汗だくになりながら仕事をしていました…

早く涼しくなってほしいような…でも、食欲は早くも旺盛になってきております！

やっぱり秋は食べ物がおいしいですねv

さて、どうでもいい話はここまでにして、「繋がる世界」第10話、始まりです

10・スナック「お登瀨」

一方、こちらお江戸は新宿かぶき町にある場末のスナック・「お登勢」。

現在、ここでは3人の店子たちが無料奉仕で働いていた

「はあ・・・なんだって僕までこんな目に・・・」

只今、モップを以って床磨きに勤しんでいるのは、「万事屋銀ちゃん」が助手・志村新八（from パラレルワールド）。

その近くでは銀時と神楽が何やらブーたれながら、酒瓶を運んだり、はたきを使っていたりしている。

「まったく、ブーブー言ってる暇があるなら手え動かしな！」

ふー・・・

と、タバコの煙を吐きつつそう言うは、かぶき町四天王が一人・お登勢こと寺田綾乃である。

「うつせーなー、ちゃんと手は動かしてるだろうが。まったくよー」

お登勢の言葉で銀時の額に青筋が浮かぶ。

運んでいた酒瓶を乱暴に下ろして、わざとらしく肩を回してみせる。

「まったく、何が悲しくて朝から荷物運びなんぞせにやならんのだ」
「グダグダ言ッテネーデ働ケヤ、コノ愚民ドモガ」

そんな銀時たちに横から片言で嫌味を垂れるのは、スナック「お登勢」の従業員・キャサリンである。
ちなみに、コイツ、猫耳なのに全然萌えないという少し痛いキャラである。

「ウッセーんだヨ、黙れこの猫耳年増女！」
「ソツチコソ黙レ、コノアルアル怪力娘!!」

ギャーギャーと、いつもの如く神楽とキャサリンの言い争いが始まった。

「はぁ・・・」

それを傍で聞きつつ、新八は、何故「お登勢」でこき使われることになったのかの経緯について回想し始めた

時は10分程前に遡る。

新八の姉・妙の嵐のような襲撃が去り、やっと万事屋が平穏を取り戻しかけていた矢先。
再び玄関の扉が開けられるガラガラ、という音が、先程とは違って穏やかに聞こえてきた。

「あ、誰か来たみたいですよ」

ようやく万事屋に慣れてきたらしいパラレル新八がのんびりと言う。

「あ？今度は誰よ」

対して銀時は少し不機嫌な顔をして玄関の方に目を向ける。
そもそも人様ん家にインターホンも押さず、勝手に入ってくるような人間に口クな奴はいない。
と、そんなことを言っている間に問題の人物はガラツと不躰に居間まで入ってきた。

そこにはスナック「お登勢」の店主にして、「万事屋銀ちゃん」の大家でもあるお登勢が仁王立ちでタバコをふかせていた。

「えっ、理事長先せ・・・?!」

「何、インターホンも押さずにかずかと。不法侵入で訴えますよ」

つい驚きの声を発してしまった新八だが、その声に被さるように銀時のやる気のない声が続いた。

しかし、それを聞いたお登勢は怯むどころか、入ってきたときの表情はそのまま、背後の怒りオーラを肥大化させて低く言った。

「・・・それは家賃をちゃんと払ってる奴が言う台詞じゃないのかい？・・・っーわけで、今日という今日は溜まった家賃、耳をそろえて返してもらっからね」

お登勢のその言葉に家の中の空気が変わった。

痛いところを突かれ、銀時と神楽はお登勢から顔を逸らす。

事情が分からない新八も、なんとなく嫌な雰囲気は感じ取っていた。

「・・・金なんかねえよ」

「嘘つくんじゃないよ。昨日依頼があつたのは分かつてるんだっ。

金、入ったんだろ」

銀時がいつもの如く家賃が払えない旨を伝えると、すかさず正論で返された。

さすがはかぶき町の女帝。江戸の町の情報ならなんでもござれである。

しかし・・・

「うっせーなーっ、んなこと言われてもねーもんはねーんだよ！ウチのエンゲル係数いくつだと思っただっ」

顔に青筋を浮かべて銀時が叫ぶ。
いわゆる逆ギレである。

だが、かぶき町の女帝も黙っちゃいない。

「・・・だったら滞納した家賃分、ウチの店で働いてもらおうじゃないかツツツ」

と、そんなこんなで現在に至るのだが。
・・・って、こんな前にもなかったっけ？

「だからってな、なんで僕までこんな目に・・・」

はぁ・・・

(異次元に飛ばされるは、その先でタダ働きはさせられるは・・・
理不尽だー！っつっ！！！)

とか何とか、新八が心の中で叫んでいると、
ガラガラ・・・

朝からスナック「お登勢」の扉が開けられた。

「おお、ここにいたか銀時・・・」

そう言っ入って来たのは長髪で、顔はなかなかの美男子だった。傍らにはオケの太郎のような謎の生命体を連れている。

「あゝ・・・誰かと思えばツラじゃねえか」

「ツラじゃない、桂だ」

そう、この男、巷でも有名なテロリスト、もとい攘夷志士の桂小太郎である。

ちなみに傍らのオバは彼のペット・エリザベス。

その桂はいつものお決まりの台詞を言うと、さっさと店のソファアに腰掛けた。

それを見て驚いているのは新八である。

（ええつつ、桂さんにエリザベス！！？な、なんでこんな所に・・・）

10・スナック「お登瀬」(後書き)

ここまでお付き合いありがとうございました^^

今回は題名の如く「スナック お登瀬」が舞台でした。個人的には
キャサリンの片言を書くのが面白かったです。

そしてツラは一体何をしに来たのでしょうか…乞うご期待！(？)

11・3年Z組（前書き）

さて、皆様に見て頂けているお陰で「繋がる世界」も早11話目です！

今回はあの人もこの人も登場しますよ^^

あなたのお気に入りキャラは登場しているでしょうか？

では、の本文をどうぞ！！

11・3年Z組

朝からなんやかんやあったが、ようやく新八は3-Zの自分の席で落ち着くことができていた。

ちなみに新八の席は廊下側の窓際の列、前から2番目である。

しかし、席には落ち着いたものの、彼の心境はとても落ち着けるものではなかった。

何故なら

午前8時40分。

後5分程でホームルームが始まるつという時間。

教師のいない教室では、まだ生徒達があちらこちらでワイワイと騒いでいる。

その一部始終を覗いてみよう。

まず、新八の席から1列おいた左側の列では

「てめつ、何私のうさぎちゃんリンゴ勝手に食ってくれてんだあ、ごるああっ!!」

中国からの留学生・神楽がとても女の子とは思えないような形相でクラスメートにメンチをきっている。

どうやら早弁していたところ、弁当のおかずを横取りされたようだ。

(・・・というか、この時間に”早弁 って、早過ぎない?)

しかし、神楽に不良顔負けのメンチをきられている相手　猫耳団地妻、もとい女子高生・キャサリンも負けてはいない。

「ハンツ、ウサギリノゴグライデガタガタ五月蠅イネ。ヨク言ウデシヨウ『ヒトリノモノハミンナノモノ。ミンナノモノハワタシノモノ』」

(いやっ、それを言うなら『ひとり』は皆の為に。皆はひとりの為にでしょ?!何っ、そのジャ　アンの格言!!!)

と、新八が心の中でツッコんでいる間に、2人はとうとう殴り合いにまで発展してしまった。

しかし、このクラスではそんなことは日常茶飯事であるらしく(実際、教室の後ろでは相変わらず近藤くんが妙にポッコポッコにされている)、止めるものは誰もいない。

さて、そんな留学生達の血で血を洗う弁当争奪戦の左隣では2人の男子学生が何やら話している。

「土方さん、今日は俺から土方さんにプレゼントがあるんでさあ」「いらん。どうせまたくだらねえこと企んでるんだろ」

銀魂高校風紀委員会副委員長の土方十四郎と、同じく風紀委員の沖田総悟である。

土方は瞳孔こそ開き気味だが、ワイルドな無造作ヘアとクールな態度、

沖田は腹黒ドSだが、栗色のサラサラヘア、涼やかなマスクで一部の女子には絶大な人気がある。

「そんなつれないこと言わねえてくださいよ。これなら土方さんも気に入ってくれるだろうと思っただわざわぎ持ってきたんですぜい」

そう言っただ沖田が差し出したのはDVD。それもアニメの。

ケースにはお団子頭の美少女が、刀を持ってポーズを決めている。

「・・・おい総悟。なんだこれは」

「何っただ、決まっただるじゃないですかい。今超流行のアニメ『美少女侍・トモエ5000』ですよ。ちなみに、これは第2期の『R』
でさあ」

「そうじゃねえっ！なんでそんなもんを俺に寄越そうとしてるのか
っただ聞いッてるんだよっっ」

そういッただ米神に青筋を浮かべる土方に対し、沖田はあくまでも飄々
々と続ける。

「いや、だっただ土方さんこっただいうの好きでしょ」

「好きじゃねえよっ！何勝手に人のキャラ捏造してッくれてんだっっ」

とうとう机から乗り出し沖田に掴み掛かる土方くん。

しかし、首を絞められながらもそれでもあくまで飄々と沖田くんは
話を続ける。

「いや、でも俺見たんですぜい。土方さんがコレ録画予約し忘れて
嘆いッてるの。だから憐れなオタク野郎に恵んでやろうかと思いまし
てねい」

「俺がいつそんなもんの予約し忘れて嘆いたっただ言ッつんだ、あ、あ
っっ！？」

いつの間にか首締めから竹刀での攻撃に変わった土方くん。
しかし、沖田くんはその土方の攻撃をひよいひよいとかわしながら、
少し考えた後にさらりと saying のけた。

「あ、そっぴゃあ、よく考えたらあれ、夢でした」

つつつツツツケんなあああつつつ!!!

土方くんの怒号が木霊した。

さてさて、そんな土方・沖田がチャンバラを繰り広げている左隣の
列ではグラサンに髭の、おっさんっぽい外見の男子学生・長谷川泰
三がアルバイト情報誌を見ながら何やら呻いている。

「・・・畜生、この不景気じゃどこも俺なんか雇ってくれやしねえ
つ。グラサンか？グラサンがいけねえのか?! ああ、このままじゃ
あ、また留年決定だああつつつ!!!」

・・・長谷川くん、どうやら本当におっさんであるようである。

さてさてさて、そんなあつちもこつちも騒がしい3-Zの教室であ
るが、中には物静かに自分の世界に入っている人もいる。
新八がふと見ると、神楽の前の席にいる長髪の男子生徒・桂小太郎
は机に向かって何かを書いている。

「あの、桂さん。何書いてるんですか？」

なんとなく、本当になんとかなく気になったので新八は声をかけてみる。

すると、無言で振り返った桂くんは今まで何かを書いていたノートを新八に見えるように 紙芝居の要領で 両手に持った。

「これだ」

と、そこにはキャップ帽にパーカーを着てラジカセを持った桂自身と、彼のペット 謎の生物エリザベスが描かれている。
しかもご丁寧の色までついている。

「何コレ」

あまりの衝撃に考えるよりも前に上記の台詞が飛び出した。
心持冷たい言い方になってしまったかもしれない。

が、それだけ衝撃的過ぎたのだ。・・・色々な意味で。

「今日の夢の内容だ。俺とエリザベスがラップで地球平和を訴えていた、様な気がする」

・・・いや、アンタが訴えているのは地球平和じゃなくて攘夷活動でしょ？！テロリズムううつつ！！

と、心の中で弾丸ツツコミをかました新八であったが、実際は無言で桂の前から立ち去った。

彼の発言・行動に深く突っ込むのは無意味だと経験上知っているからである。

と、ここまで見てきただけでも分かる通り、この3年Z組という

クラス、一筋縄ではいかなさそうなヤツ等ばかりである。

(・・・つか、いくらパラレルワールドとはいえ、何でいつもの『馬鹿共』が一所に集まってんだ?!・・・何事もなければいいけど・・・)

そう、新八が胸中で呟いた時である。

教室の前の引き戸がガラリと開けられた。

「朝からギヤーギヤーやかましんだよ。思春期か。青春ですかコノヤロー」

3-Z担任教師・坂田銀時が全くやる気を感じられない声音で一同を一喝した。

11・3年Z組（後書き）

はい、ここまで読んで頂きありがとうございます。

今回は正直いろいろやってしまったなあ…と思っています。

小説版「3年Z組銀八先生」をご覧になったことのある方なら「おや」と思う場面やらセリフやらがうじゃうじゃ…

でも、今回の話は書いてとても楽しかったです^^

さて、次回から更新頻度が落ちてくるかもしれません。

次回作が2週間後・1ヶ月後になってしまう可能性もありますが、お話を完結させる気がありますので、気長に待つて頂けると幸いです。

12・依頼（前書き）

おはようございますorrこんにちはorrこんばんは！
とうとう10月ですね。投稿を初めて早2か月！なんとかかんとか更新続けられております。これも一重に、こんな駄文を読んでくださる方がいるからです。ありがとうございます！！
では、いつも前書きが長くなってしまってますみません。
本編へどうぞ！！

12・依頼

「と、言うわけだ」

と、至極真面目な顔をして語り終えたようなのは、狂乱の貴公子・桂小太郎。

その横では、相変わらず何を考えているのか分からないが無駄な存在感を発揮している謎の生物 エリザベスが、運ばれてきた蕎麦をどんぶり毎口の中に入れているところである。

「って、と言うわけも糞も、一話飛び越えて喋ってつから、読者何にもわかんねえよつ。』と言うわけ』の内容を全く把握できてねえよっ!」

銀時が間にあるテーブルを飛び越えて桂の顔面に蹴りをかます。テーブルの上に載っているパフェやら何やらは無傷で、桂の顔面だけにクリティカルヒットをかます銀時はある意味すごい。

現在、一行は「お登瀨」から場所を移して近所のファミレスの6人掛け席で向かい合っていた。

一方には奥から神楽・銀時・新八、向かい合った反対側の席には奥からエリザベス・桂といった配置である。

「とにかく、もっと回要点掻い摘んで話せ。無駄な回想とかはいらないから、要点だけな」

と、いかにも面倒くさそうに、しかし好物のパフェだけはしっかりと運びながら銀時は言う。
それを聞いた桂は「分かった」と頷き、今回の用件を話し始めた。

「とある攘夷志士の一党が近日、ターミナルへのテロ行為を計画しているとの情報を手に入れた。作戦名は、そう、『ジャスタウエイ大作戦！！』」
「いやっ、だからなんだよその作戦名っ！つか、それ以前にジャスタウエイって何っっ？！」

桂の言葉を途中で遮る形で新八がツッコんだ。

「ジャスタウエイはジャスタウエイ以外の何物でもないっ！それ以上でもそれ以下でもないっっ！！」
「いや、何至極真面目な顔で訳分かんないこと口走ってんのっっ」

最早肩で息をしながらツッコむ新八。
若干目が血走っているような気もする。

「まあ、そうカツカすんなよぱつつあん」

そう言つて新八を宥めるように彼の肩に手を置いてソファに座らせ
たのは銀時。

その流れで新八の耳元に口を寄せると銀時は言った。

「こいつの言うことに一タツツコムな。余計脇道に逸れるぞ」

あんま長いこと関わり合いになりたくねえんだから、黙って話を聞け
と言つ銀時に対し、新八は渋々といった感じで頷いた。

(それにしても…)

と、新八は目の前の長髪の男と謎の宇宙生物を見遣りながら考える。

(まさか、この人達までこちらの世界にいるとはね…)と。

(…向こうの桂くんはただの電波馬鹿だったけど、こっちの彼は…
何？攘夷志士！？でも銀さんはテロリストだって言ってたし…大体
こっちは銀さんとタメみたいだし……もう、わけが分からなくな
ってきたっつっ!!!)

一人混乱する新八をよそに、桂は話を進めていく。

「要するに、ヤツ等はジャスタウェイを大量に持ち込みターミナル爆破を企んでいるんだ。しかし、ターミナルは世界の要。多くの者が出入りしている。そんな所でテロ行為なんかをされては多くの罪のない市民までも傷つくことになる。したがって……」

と、かなり久しぶりに本当に真面目な台詞を言った桂は、最後になり溜めて溜めて溜めてこう言った。

「ヤツ等のターミナル爆破計画、もとい『ジャスタウェイ大作戦！
！』』 阻止を手伝ってほしい」

これが3-Z新八が万事屋に来て初めての依頼となった

八 (…って、いうか、最後溜める意味あったのっっっ?!) b y 新

12・依頼（後書き）

はい、というわけで第2章はここまでです。

前回、次回分から更新頻度が遅れるかも、と言っていました。なんと今回はすぐに更新することができました。

若干いつもより短めかもしれませんが、ご勘弁を。

でも、次回分からは本当に更新遅くなりそうです。

まだ第3章の題名も決まっています。書き始めてもいませんので…気長に待つて頂けると幸いです^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3710v/>

繋がる世界

2011年10月10日10時00分発行